

令和5年度

第1回山形市文化財保護委員会

日 時 令和5年7月5日（水）
10時00分～11時00分
場 所 やまがたクリエイティブシティ
センターQ1 交流ルーム1

次 第

1 開 会

2 委員長あいさつ

3 報 告

(1) 市指定文化財の候補物件について

① 金勝寺木造釈迦如来坐像 資料1

② 勝因寺木造聖観音菩薩立像 資料2

③ 勝因寺山門二階天井画 資料3

(2) 文化財の市指定に係る諮問について 資料4

4 協 議

(1) 市指定文化財の指定に係る答申について 資料5

5 その他

6 閉 会

出席者名簿

■山形市文化財保護委員会委員

任期：令和4年6月1日から令和7年5月31日まで

氏名	職業等	備考
荒木 志伸	山形大学学士課程基盤教育機構准教授	
伊藤 清郎	山形大学名誉教授	委員長
北野 博司	東北芸術工科大学教授	
佐藤 琴	山形大学学士課程基盤教育機構准教授 山形大学附属博物館学芸研究員	
志村 直愛	東北芸術工科大学教授	
長坂 一郎	元東北芸術工科大学教授	
野口 一雄	元山形県立博物館専門嘱託	

(五十音順)

事務局

山形市企画調整部	文化スポーツ推進監	花輪 信二
	文化創造都市課長	森 俊
	文化創造都市課長補佐	山川 渉
	課長補佐（兼）文化財係長	齋藤 仁
	主 幹	田辺 政則
	地域おこし協力隊	今 のどか

金勝寺	木造釈迦如来坐像
-----	----------

員数： 一軀 安置場所：本堂須弥壇上本尊

所在地：山形市山家本町 2-3-10

宗 派：曹洞宗 開山期：南北朝

調査日：令和 5 年 2 月 16 日 調査者： 長坂一郎、齋藤仁、
茂木健男、植松薫

法 量 (cm)

(本軀)

像高	66.0 (二尺二寸)	胸厚 (右)	16.8
髮際高	46.0	腹厚	18.5
頂-顎	31.5	肘張	37.6
面長	13.5	膝張	32.8
耳張	13.5	坐奥	33.5
面幅	11.1	膝高 (左)	9.4
面奥	14.9	膝高 (右)	9.0
裙先出	8.2		

形 状

髻を結う如来形坐像。

髻を結び、宝冠をつける釈迦如像は「宝冠釈迦」や「華嚴釈迦」と称され、鎌倉時代後期、鎌倉・円覚寺（北条時宗により無学祖元を開基として建立）の本尊として造立されて以後、関東の禅宗寺院の本尊として造立された。

高髻を結う（現状は前後が逆になっている。後世の補修の時に誤ったものと思われる）。高髻は二段で上方は二房、下方は三房の毛房を作る。高髻正面（現状では後方）上部に五角形の飾りを付ける。地髪部および髮際部は毛筋彫。天冠台彫出。天冠台左右に髪の毛二条を各からませる。

金属製の冠をかぶる。

白毫相を表す（現状は後補）。玉眼を嵌入する。耳朵を貫通する。耳朵には鬢髪一条を渡らせる。鼻孔を穿つ。三道を表す。

衲衣を通肩に着ける。腹部に下着を見せる。

裙を着け、左足を上にして結跏趺坐する。

腹前で法界定印を結ぶ。

品質構造

寄木造り。玉眼嵌入。肉身漆箔。衣彩色。

頭体は両耳後ろを通る線で、前後二材矧ぎ付け。前面材は像心束および前後束を残す。背面材も前後束を残し、襟口で頭部、体部を割る。

玉眼を嵌入する。

左側面材一材矧ぎ付け。右側面材一材矧ぎ付け。

両脚部一材製、矧ぎ付け。

内剝りを施す（現状は体部は黒漆塗り、頭部は黒漆なし）。前後束を含めて、矧ぎ目には布張を施す。

高髻は一材製で矧ぎ付け。

衲衣の端部分に「盛り上げ彩色」を施す。

保存状態

全体としては良好。

後補部は高髻が前後逆になっていることおよび高髻の二段目の左右に小材が後補されている。

体部内部の黒漆塗は後補か（頭部内には黒漆塗がなされていない）。

白毫後補。

所見

高髻で地髪、髪際を毛筋彫りとする形式は鎌倉時代以降に見られるものである。衲衣が長くなり、肩の折り返しが大きくなるのは鎌倉時代後期からみられる。

一方、頭部が大きく体部が小さい体形は南北朝から室町時代に見られるものである。その中でも鉢が開いてやや下膨れぎみの四角い輪郭で、目はうつむき加減とする面相表現、波打つような衣文線の表現などは南北朝期の院派仏師の作品の特徴である。また、両肩で大きく折り返す衲衣に「C字」形を表すことも院派作品に見られるものである。

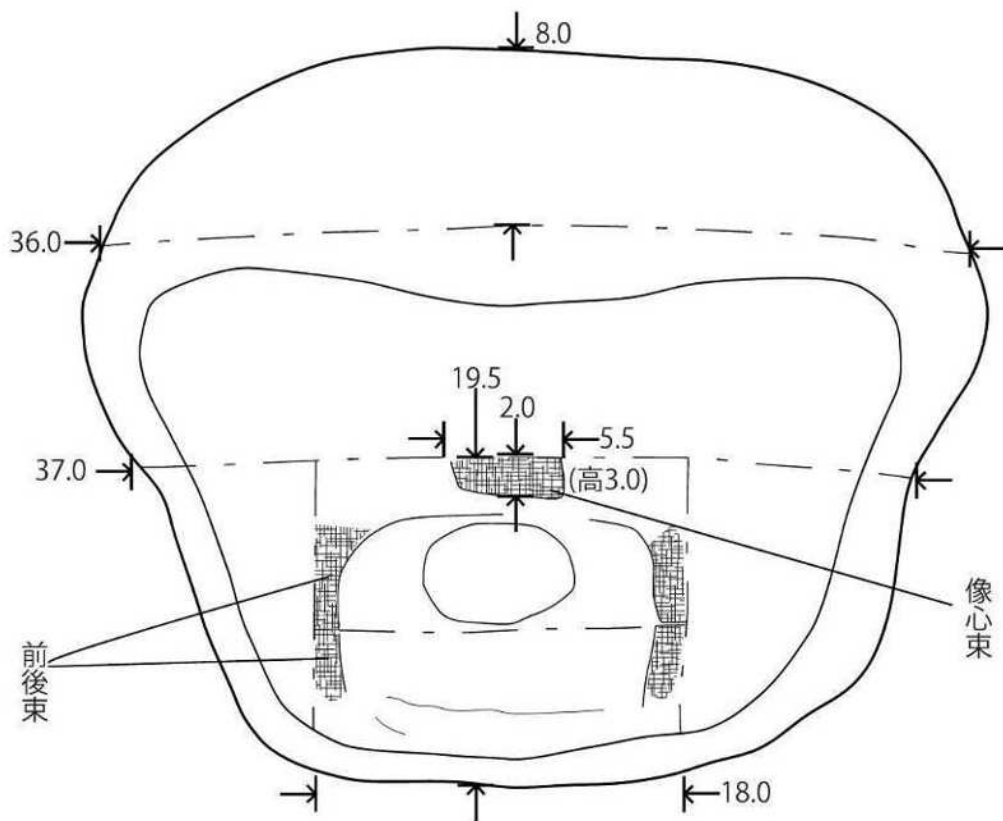
さらに、体内部に前後束を残すことも同時期の院派作品に見られることが知られている。作風としては、像の構造は明瞭で、内剝りも深い。しっかりとした面貌表現、さらには盛り上げ彩色を施すなど、全体として中央の仏師の手になるものと思われる。

特に観応3年（1352）、院吉、院広、院遵の銘を持つ重要文化財・静岡・方広寺・木造釈迦如来坐像に酷似することに留意される。ただし、本像はそれに比すると表情がやや陰鬱になり、また右肩や両脚部の衣文線の表現にやや煩雑さが加わり、さらに腹部に下着をみせるなど、異なる要素も見られる。したがって、本像は方広寺像よりやや下の南北朝末期から室町時代初期の制作と思われる。

本像安置の金勝寺は「最上氏系図（『寛永重修諸家譜』）」によれば、応永17年（1410）に没した斯波直家の菩提のために次代の満家の創建とする。あるいは金勝寺創建時の本尊と考えられようか。

室町時代の院派仏師は、院吉が足利尊氏創建の京都・天龍寺・釈迦三尊像を造立したのをはじめとして、足利將軍家関連の造像に重用された。本像の制作も、そのような環境のもとでなされたものと思われる。斯波氏と足利將軍家との関係の証となるものと考えられる。

像底図





正面



背面



左側面



右側面



像底



頭頂



左斜



右斜

【参考】

木造釈迦如来坐及び両脇侍坐像 院吉、院広、院遵作（国指定重要文化財） 静岡県浜松市北区 方広寺蔵
中尊像底に観応3年（1352）、院吉・院広、院遵、左脇侍像底に院広、右脇侍像底に院遵の刻銘がある。



勝因寺	木造聖観音菩薩立像
-----	-----------

員数：一軀	安置場所：観音堂
所在地：山形市鉄砲町1-4-8	
宗派：臨済宗	開山期：鎌倉期
調査日：令和4年10月24日	調査者：長坂一郎、齋藤仁、 茂木健男

法量 (cm)

(本躰)

像高	60.3	胸厚	8.7
髮際高	50.1	腹厚	9.6
頂-顎	17.1	肘張	20.2
面長	6.7	面幅	6.1
面奥	8.1	耳張	7.7
足先開 (内)	4.3	足先開 (外)	9.2
裙裾張	12.0		

形状

菩薩形立像

高髻。髻基部に結び紐一条を表す。地髪部は平彫りとし、髮際は毛筋彫りとする。

天冠台は紐一条の上際に列弁とする。

鬢髪は一条を耳半ばを渡らせ、さらに耳前にも垂らす。

彫眼とし、白毫相を表す（現状白毫欠失）。耳朵は貫通する。三道を彫出する。

天衣、条帛をつける。条帛の端は左胸で上から入り下から出す。

左手は屈臂して前に出し、左腰前で五指を丸め持物を執る（現状、蕾のついた蓮茎）。

右手は屈臂して胸前に立て、掌を左斜めに向けて指を伸ばす。

腕釧をつける。

裙、腰布をつける。

裙は正面で右前に打ち合わせ、腰で折り返しをつくる。

右足を軸足として左膝をやや緩めて前に出し立つ。

品質構造

木製。寄木造。彫眼。彩色。

頭部は耳前を通る線で前後二材矧ぎ寄せ、三道下で体部に差し込みとする。髻部は一材製で矧ぎ付けとする。

体部は背面、肩の後方を通る線で前後二材矧ぎ付けとし、内剝りを施す。

左手は肩、肘前で各別材矧ぎ付けとし、右手は肩、肘前（前膊後方部および下方部に補材を入れる）で各別材矧ぎ付けとする。

両足先は各別材矧ぎ付けとする。

後補部等

髻部。天衣垂下部。持物。両肘以下前膊部。両足先。両足柄。表面塗膜。

所見

全体に穏やかに整った印象の作品である。

面相部が小さく足の長いプロポーションは平安時代後期の作に通ずるが、体部は肩幅が広く、脇腹を引き締め、肉体表現の意識が見られる。

面相は丸みを基調に穏やかな表情を見せるが、目鼻はやや大きくなり、やや意志的で厳しさも感じさせるところは平安時代の感覚とは異なることを思わせる。

髪際は毛筋彫りにするところ、目の形が切れ長でやや吊り上がっているところは、鎌倉時代の表現にまま見られるものである。

衣文表現は彫りが浅く平安時代後期のものようであるが、条帛や裙の衣文線の数が多くなっており、その表現は鎌倉時代に入って見られるものである。

裙の折り返し部に「猪の目」表現を見せるところ、裙の正面打ち合わせ部にたわめ表現を見せるところは装飾的な意識を感じさせ、これも平安時代の素直な表現意識からは脱しているように思われる。

以上により、本作は平安時代後期の様式を基調にしながらも鎌倉時代の表現意識を加えたものの、すなわち制作は平安時代末期から鎌倉時代初期・12世紀末の作であると考えられる。

像の姿は現状両肘以下が後補になっており確実ではないが、両手が前の形を踏襲しているとするれば、左手は腹前で「未敷蓮華」の茎を握り、右手は胸前に立てるいわゆる「横川式観音像」

（本来は「胎藏界曼荼羅」観音院主尊を立たせた形。円仁造立の比叡山延暦寺横川中堂本尊の形であり、天台宗ではとくに尊重され、遺品は多い）であったものか。

現在は後補の作であるが、脇侍像として毘沙門天像、不動明王像を従える。それらが当初の三尊形式を踏まえたものとするれば、まさに比叡山横川中堂三尊形式と同じであり、当初は横川中堂三尊像として安置されたものと考えられ、その可能性は高い。とすれば、本像はもとは天台宗により制作されたものとすることができよう。本像の作行からみると、在地での制作ではなく中央につながる仏師の手によるものと思われる。鎌倉時代初期に当地の新たな支配層によってもたらされたものであろうか。



正 面



背 面



左側面



右側面



頭 部 正 面



頭 部 背 面

勝因寺山門二階天井画について

山形大学学術研究院
准教授 佐藤琴

勝因寺山門天井画の全容

1770 年（明和 7）に完成した勝因寺山門の二階に格天井がある。縦（南北方向）10 面、横（東西方面）16 面、計 160 面あり、それぞれに絵画と隷書体の漢字 1 字を配する。内訳を以下に記す。配置図は図 1 のとおりである。

漢字 1 文字	80 面
「祐川画」	10 面
「一蜻画」	14 面
判読不明壺印	1 面
無落款	54 面
「ひがし みなみ」	1 面

160 面のうち、絵画の天地はさまざまだが、漢字 1 文字は東西方向のいずれかを向いており、数も 80 面つまり、160 面の半数である。このことから、現状の A2・A3・A4 と N7・N8・N9 に漢字が並んでいるのは後から改変されたものであり、完成当初は漢字が全て交互に配置されていたものと推測される。

また、画風から「祐川画」と「一蜻画」の落款をもつものは、それぞれ一人の絵師の手になるものと判断する。無落款の 54 面と壺印が押された 1 面は統一感がなく、描き方も「祐川画」落款のものとは比べると絵画技術に習熟しているとは言い難い。この差を同時代ではあるが、絵師の技量の差とするか、または後からの取り換えた結果とするか、現段階では判断を保留する。

「祐川画」落款の 10 面についてである。画題は以下のとおりである。

E 3	金魚図	F 8	麒麟図
G 3	松上鬼図	G 5	金鶏図
H 6	朝顔図	I 5	水仙図
I 7	鳳凰図	J 3	海棠に綬帯鳥図
K 3	鶉図	M 5	亀図

祐川とは

『山形市史』によれば、祐川は藤沢祐川のことであり、鳥海月山両所宮の社家に生まれた絵師である。円応寺に「天明七年七月十四日没 神齋祐川居士」の墓があり、1789

年に没したとされる。また、『湯殿山道中一覽』（1820年（文政3）刊）の原画を描いた義川の師とも伝えられている。

天明2年（1782）に竣工した鳥海月山両所宮隨身門の天井画を手掛けており、そのうち鳳凰図、麒麟図、蓑亀図は勝因寺山門二階天井画にもある。両者は図像・彩色・筆法・落款位置の全てが一致する。よって、両者は同一筆者の手になる。勝因寺山門にも隨身門にある鶴図や龍図などが完成当初には存在していたのかもしれない。そう考えると、現在の山門二階天井画の落款のない絵は後から補われた可能性がある。

画題について

次に鳥海月山両所宮隨身門天井画と共通する画題について説明する。

鳳凰図（I7）

鳳凰は古代中国で生まれた想像上の鳥である。全ての鳥を生んだ「百鳥の祖」、または360種類ある鳥類の長とされた。支配者の統治が優れている時に出現するといわれ、日本においても為政者の居城の障壁画などに描かれた。また、1053年（天喜元）に完成した平等院鳳凰堂の屋根に掲げられた金銅の鳳凰に代表されるように寺院装飾にも飛鳥時代から用いられており、仏教とともに伝来したと推測されている。

鳳凰の姿は、孔雀に似た大型の鳥として表される。しかし、頭頂部の冠などの形状が孔雀とは異なる。尾羽も、孔雀は垂直に立ち上がり放射状に広がるが、鳳凰はより長く、波打つように翻る。また絵画の場合は、体色も孔雀色とも称される青緑色だけでなく、赤・青・白など複数の色が用いられる。本図の鳳凰は、上記の特徴を持ち、江戸時代の狩野派の鳳凰図によく見られる飛翔ポーズで描かれている。

麒麟図（F8）

日本ではキリンビールでお馴染みの麒麟も古代中国で生まれた想像上の動物である。仁徳を備えた「仁獣」であり、360種ある毛の生えた動物の長とされた。絵画作品として有名なものは「鳥獣戯画」乙巻（平安時代後期（12世紀））である。鳳凰と同様に支配者の統治が優れている時に出現するといわれ、鳳凰と対とした掛軸が江戸時代には多く残されている。

麒麟の姿は鹿に似た大型の四足獣で表される。しかし、枝分かれした一本の角と牛のように長く先端に毛のある尾を持つ点が異なる。また、時代が下るにつれて、身体的な特徴が付け加えられていき、龍のような背びれと鱗をもち胸と腹を蛇体にしたものや、角を2角にした作品も見られる。

本図の麒麟は、体毛には短い渦巻が散らされ、鬣・顎鬚・尾・脚の付け根・膝関節の後ろ側には長い毛が渦を巻き毛先がたなびいている。龍に見られる尖った背びれと脚の付け根の炎もある。これらの特徴は狩野派の麒麟図によく見られる。

亀図（M6）

亀は「鶴は千年、亀は万年」と称され、長寿の象徴である。絵画だけでなく工芸品の

図案にも用いられ、今もなお縁起物として制作され続けている。亀は実在の動物であるが、これまで説明してきた鳳凰・麒麟と同じく、古代中国においては甲羅や殻をもつ動物 360 種の長とされた。甲羅から長い毛が伸びているものは日本においては蓑亀と称する。蓑のような毛は緑藻であり、亀の長寿を視覚的に表現したものである。

次に他の画題について述べる。

金鶏図 (G5) と海棠に綬帯鳥図 (K4)

鶉は輸入された中国絵画をもとにして日本においては中世から描かれるようになった。土佐派が得意としていたが、狩野派の絵師も数多く描いている。一方、金鶏図と海棠に綬帯鳥図は、江戸時代中期以降に盛んに描かれるようになった画題である。

それをもたらしたのは 1731 年 (享保 16) に来日した清の絵師・沈南蘋 (1681-?) である。沈南蘋の絵画は、当時、画壇の主流を占めていた狩野派とは異なる、緻密で華やかな表現で鳥や花々を描き出したものである。その後、沈南蘋の絵画を継承した日本人画家も現れた。彼らを「南蘋派」と称する。

金鶏図と海棠に綬帯鳥図は南蘋派の絵画によく見られる。そして、南蘋派だけでなく他の絵画を学んだうえで、さまざまな工夫を重ねて独自の画境を切り開いた円山応挙 (1733~1795) や伊藤若冲 (1716~1800) に金鶏図がある。金鶏図は当時流行していた画題といえるだろう。

狩野派の画技を身に着けた祐川が南蘋派の絵画を学んで描くことはありえる。長崎で始まった南蘋派を関西に伝えたのは鶴亭 (1722-1786)、江戸に伝えたのは宋紫石 (1715-1785) であり、祐川が 1770 年にこれらを学んで描くことは可能である。

金魚図 (E3)

最後に金魚図についてである。鯉や鯰などの川魚を描くことは日本の絵画のルーツである中国で古くから行われ、日本でも中世に描かれた作品がある。しかし、金魚が日本で描かれるようになったのは、さほど古いことではない。

そもそも、観賞用に金魚を飼育することは室町時代に中国から伝来し、江戸時代前期 (17 世紀) には富裕層の娯楽として浸透していった。金魚売りが描かれた最も古い絵は 18 世紀前半に制作された「江戸風俗図巻」(大英博物館蔵) であり、この頃から庶民にも広まったことがわかる。浮世絵では 18 世紀後半から金魚を眺める遊女の絵が登場しており、金魚飼育が広まっていたことがわかる。

また、金魚そのものを主題とする絵画は、日本文人画の先駆者の柳沢淇園 (1703~1758) が手がけたとされるものが最も古い。

祐川は狩野派の画題と技法を踏襲しつつも、当時流行していた新たな画題と表現手法も積極的に取り入れる絵師だったことがわかった。

まとめ

山形に残る古い絵画は、最上時代と江戸時代後期に集中しており、17 世紀後半から

18 世紀に制作されたものはあまり残っていない。これは最上義光の孫である家信（義俊）が 1622 年（元和 8）に改易されてしまったことと関係がある。当時の絵画制作は浮世絵版画などを除いては発注者の注文によって制作されたものである。しかし、17 世紀から 18 世紀にかけての山形は、藩主の交代が相次いだ。その頃山形で制作されたであろう絵画は権力者の転出とともにこの地から失われていったのだろう。

祐川が手掛けた、鳥海月山両所宮と勝因寺の天井画は、山形の近世絵画史の空白を埋めるものとして大変重要である。しかも、祐川は狩野派をよく学び、高い技術を有しているだけでなく、狩野派以外の画題も積極的に取り入れていたことは注目に値する。祐川がどのように画技を修めたのか、その経緯を裏付ける史料はない。しかし、少し後の時代となるが、塩竈出身の絵師・小池曲江（1758-1847）は江戸に出て松林瑤江から南蘋派を学んだことがわかっている。もしかしたら、祐川も江戸もしくは上方に赴き絵を学んだことがあったのかもしれない。

いずれにせよ、勝因寺山門天井画は山形に残る数少ない 18 世紀の絵画であり、大変貴重な作品群である。

参考文献

山形市史編纂委員会『山形市史 別巻 2 生活・文化編』1976 年 山形市

王敏・梅本重一『中国シンボル・イメージ図典』2003 年 東京堂出版

小幡知之「鳥海月山両所宮隨身門について」（『日本建築学会学術講演梗概集（関東）』2015 年）

内山淳一『めでたし めずらし 瑞獣 珍獣』2020 年 パイ インターナショナル

鈴木克美『講談社学術文庫 金魚と日本人』2019 年 講談社



勝因寺山門外観

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	
1	図譜 那	那	○ 花 図	雁	撫子 図	邊	杜若 図	應	芍薬 図	鶴	葡萄栗 鼠 図	嶺	桃 図	字	龍 図	歌	
2	華	秋に鹿 図	新	立花(朝 顔花) 図	字	新葉 図	松	○ 葉に 龍 図	為	百合 図	鈴	雄鶴と雌 図	露	波に旭日 図	発	兎 図	
3		母	○ 才 リ 図	買	金魚 図	字	■ 松上 鬼 図	雪	芍薬 図	縁	■ 鶴 図	臺	進(鶴 図)	酒	黄蜀葵 図	燄	
4	字	百合 図	瑤	遊(鶴 図)	字	薄と椎茸 図	閑	○ 連池に 鶴 図	字	■ 海棠に 桜帯鳥 図	琴	三番鳥 図	鏡	○ 柳に小 鶴 図	壁	液に龍 図	
5	薔薇園 図	陸	藤 図	寒	○ 芥 図	浪	■ 金鶏 図	字	■ 水仙 図	負	○ 社若 骨 図	賜	■ 鶴 図	能	■ 梅 図	字	
6	春	八重重 図	園	海龍 図	徳	○ 扇 図	字	朝顔 図	樓	○ 柳に小 鶴 図	蘭	芙蓉 図	聲	○ 朱紫 図	字	松に小 鶴 図	
7	■ 菊 図	母	○ 朝日 竹 図	漸	○ 菅草と 鶴 図	郷	波に犀 図	字	■ 鳳 図	状	○ 朝顔に 鶴 図	西	○ 添 図	面	○ 柳に馬 図	明	
8	雲	○ 椿に 鶴 図	連	椿に小 鶴 図	座	■ 麒麟 図	袁	■ 鶴に 鶴 図	字	牡丹に唐 獅子 図	陳	○ 唐比 寿 図	獨		字	八重梅に 小 鶴 図	
9	○ 社若 図	南	○ 松竹 鶴 図	柳	○ 鳥捕蜻 蛉 図	福	○ 珠 図	宝	啄木鳥 図	眞	葡萄栗 鼠 図	濃	鐘離権 図	髮	○ 月に雁 図	字	
10	灌	○ 水仙に 鶴 図	風	○ 松竹 鶴 図	周	○ 秋に 鶴 図	哀	○ 松に 鶴 図	字	龍に茄子 瓜 図	貴	■ 鶴 図	歎	○ 鶴 図	楚	○ 鶴 図	葡萄 図

北

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

1

2

3

4

5

9

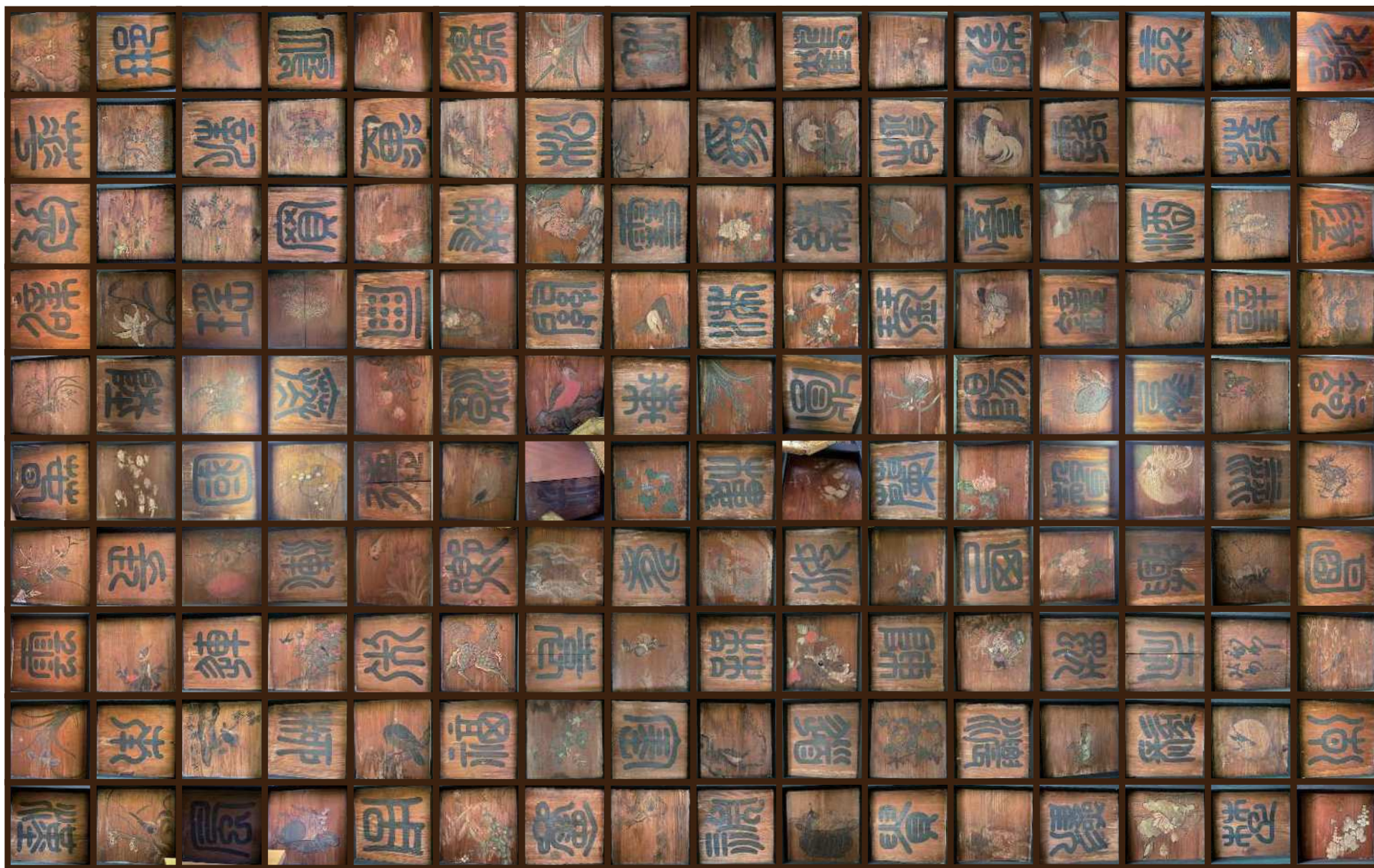
6

7

8

9

10



南

勝因寺山門天井画における藤沢祐川の作品



金魚図(E-3)



麒麟図(F-8)



松上鬼図(G-3)



金鶏図(G-5)



朝顔図(H-6)



水仙図(I-5)



鳳凰図(I-7)



海棠に綬帯鳥図(J-4)



鶉図(K-3)

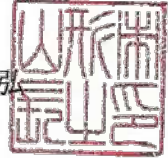


蓑亀図(M-5)

文 第 212号
令和5年7月 3日

山形市文化財保護委員会
委員長 伊藤 清郎 様

山形市長 佐藤孝弘



文化財の市指定について（諮問）

下記の文化財を市指定有形文化財に指定することについて、山形市文化財保護条例第46条の規定に基づき、貴委員会の意見を求めます。

記

分類	名称	員数	所有者	所有者の住所
有形民俗文化財	山寺立石寺奥之院の大灯籠	1基	宗教法人 立石寺	山形市大字山寺

令和5年7月5日

山形市長
佐藤 孝弘 様

山形市文化財保護委員
野口 一雄

山形市指定文化財の指定の推薦について

下記の文化財について、別紙の通り、山形市指定文化財に指定することについて、推薦いたします。

記

分類	名称	員数	所有者	所有者の住所
有形民俗文化財	山寺立石寺奥之院の大灯籠	1基	宗教法人 立石寺	山形市大字山寺

写真：北野博司委員作成



西面



南面



東面

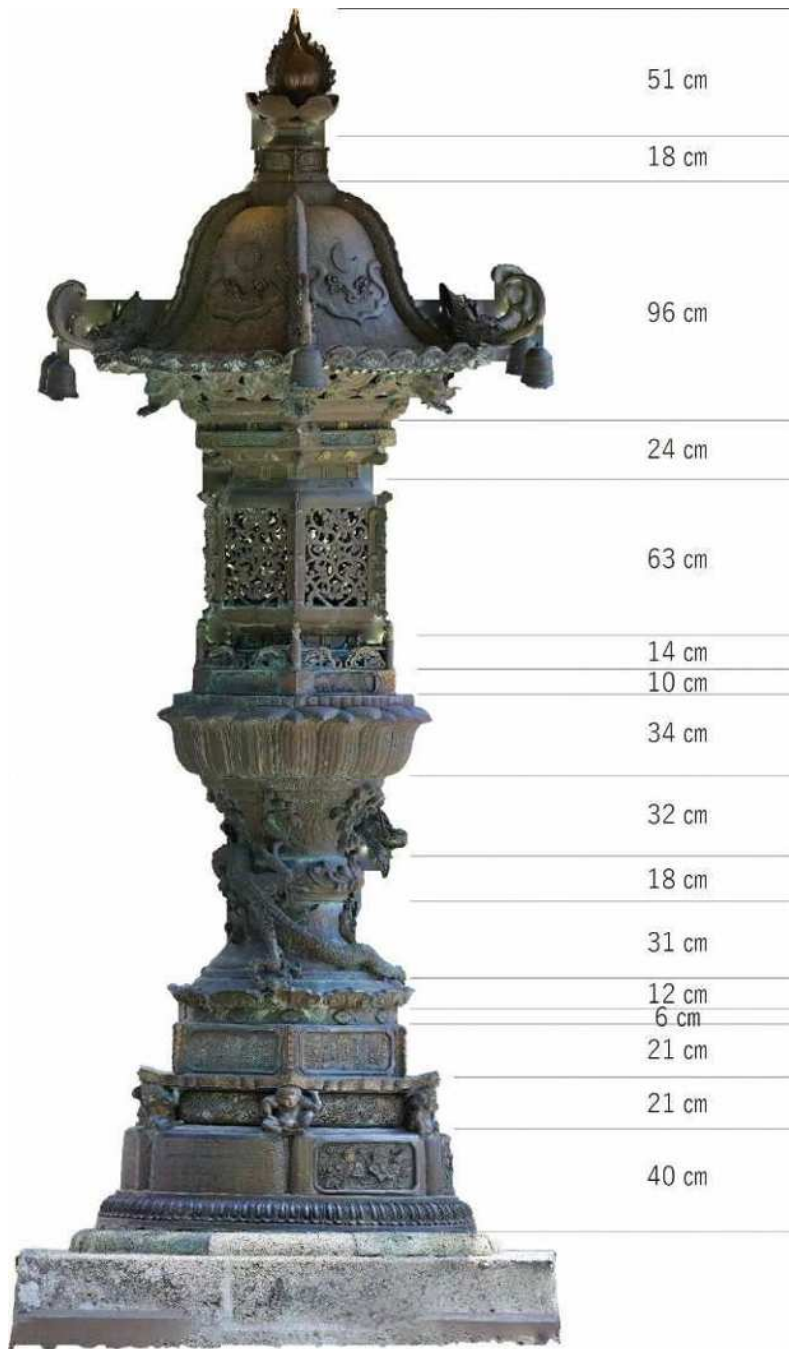


北面



俯瞰





実測図



「奥の院大灯籠奉納供養祭」(明治 28 年カ)
 (『目で見える山形・上山の 100 年』1995 郷土出版社) 所収



小野田才助と日露戦役紀念ノ梵鐘 上州太田 大光院〔徳川家康が祖新田義重の菩提所として開山〕

(案)

答 申 書

令和5年 月 日

山形市長 佐藤 孝弘 様

山形市文化財保護委員会
委員長 伊藤 清郎

令和5年7月5日付け文第212号にて諮問のありました下記の文化財を市指定有形文化財に指定することについて、慎重に審議した結果、指定することが適当であるとの結論を得ましたので、答申します。

記

分類	名称	員数	所有者	所有者の住所
有形民俗文化財	山寺立石寺奥之院の大灯籠	1基	宗教法人 立石寺	山形市大字山寺